

昨年の特集「頸椎前方手術 Up To Date」に引き続き、今回は「Up To Date 2」（いわゆる第2巻）が刊行されました。御覧のように、この2つの特集は一連の企画です。小職はかねがね、わが国の頸椎外科が諸外国に比べて後方法にシフトしていることに違和感を覚えておりました。この過剰な後方法偏重の要因を小職なりに推測すると、以下ようになります。1) 日本人の頸椎脊柱管は狭く、巨大な後縦靱帯骨化に伴う重度脊髄障害の患者さんがわが国で多い。当初、この難題に前方法で対応していた脊椎外科医の苦労は相当なものでした。2) そこに登場した椎弓形成術が、予想以上に“良い手術”でした。前方法に比べて手技がはるかに容易で、術後の管理も楽でした。加えて、どこに責任病巣があっても、画一的なC3-C7の除圧で対応が可能でした。わが国における頸椎手術の多くが後方法にシフトしたのは、もっともといえます。

当然のことながら、前方法を行う施設が激減しました。限られた施設を除き、若い先生方にとっては、頸椎の前方手術を執刀する機会が圧倒的に少なくなりました。このことは、前方法の技術が伝承されないということを意味します。加えて、椎弓形成術は“良い手術”ですので、神経所見をきちんととって責任高位を絞り込む必要がありません。このことは、診断技術の劣化をもたらした感があります。

当たり前といえば当たり前ですが、後方法が主流の時代のデータが蓄積し、それが解析されると、後方法では対応できない症例が少なからず存在することが明らかになってきました。このような状況下、最近では、前方法への揺り戻しが生じているように思います。幸いにも、後方法主流の時代にあっても前方法を続けてきた施設では、手術手技の向上に関するノウハウが蓄積されました。前方法の合併症の詳細も解析され、それらに対する対策も整備されつつあります。

一昨年の本誌の編集会議で、前方法の最近の進歩についてまとめてみたいと思い、本特集を提案いたしました。整形外科と脳神経外科の共同企画となり、飛驒一利先生と一緒に企画を進めました。さまざまな前方術式が候補として浮上したため1巻では収まらず、当初から2巻での構成となりました。

この2巻で、ほとんどの前方法の進歩を網羅した感があります。とはいえ、前方法の進歩は続いています。近い将来「Up To Date 3」を企画する日が訪れるかもしれません。そのとき、どのような内容になるのか、想像するだけで心が躍ります。

(山崎正志)

脊椎脊髄ジャーナル

編集顧問

萬年 徹 高橋 昭 金田清志
小山素麿 小柳知彦 田代邦雄
国分正一 服部孝道

編集委員

徳橋泰明（編集委員長）
金 彪（副編集委員長）
青木茂樹 亀山 隆 園生雅弘
高橋敏行 高安正和 谷 論
永島英樹 中村雅也 根尾昌志
飛驒一利 松山幸弘 山崎正志

Vol. 32 No. 8
(2019年8月25日発行)

毎月1回25日発行

1部定価（本体2,300円＋税）

（配送料別）

年ぎめ予約購読料30,700円＋税

送料弊社負担

発行／株式会社 三輪書店
代表者 青山 智

〒113-0033

東京都文京区本郷6-17-9

本郷網ビル

TEL 03-3816-7796

FAX 03-3816-7756

URL <http://www.miwapubl.com/>

（担当：山岸）

印刷所／三報社印刷株式会社

TEL 03-3637-0005

広告申込所／

（株）文栄社

TEL 03-3814-8541

（株）ハイブリッジエージェンシー

TEL 03-3814-0089

本誌の内容の無断複写・複製・転載は著作権・出版権の侵害となることがありますのでご注意ください。

Published by MIWA-SHOTEN Ltd.
6-17-9 Hongo, Bunkyo-ku, TOKYO © 2019,
Printed in Japan

3COPY 〈出版者著作権管理機構 委託出版物〉
本誌の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。複製される場合は、そのつど事前に、出版者著作権管理機構（電話 03-5244-5088、FAX 03-5244-5089、e-mail: info@jcopy.or.jp）の許諾を得てください。